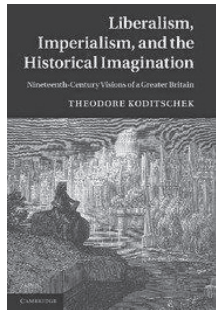
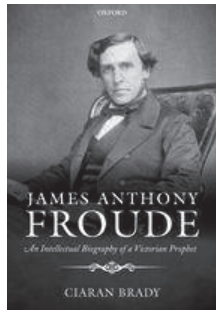
書　評

Theodore Koditschek, *Liberalism, Imperialism, and the Historical Imagination: Nineteenth-Century Visions of a Greater Britain* (Cambridge: Cambridge University Press, 2011)



Ciaran Brady, *James Anthony Froude: An Intellectual Biography of a Victorian Prophet* (Oxford: Oxford University Press, 2013)



玉井　史絵

“Rule Britannia” のなかの「ブリトン人は決して奴隷とはならじ」という一節に高らかに謳われているように、何者にも束縛されない自由の民という概念がイギリス人としてのアイデンティティの根幹にある。だが、その「自由」という崇高な理念を掲げる大英帝国が植民地での抑圧や暴力のもとに成立していたという矛盾は、19 世紀を通してイギリス人にとって深刻な道徳的、文化的、政治的問題を投げかけていた。こうした矛盾を当時の人々はどのように説明し、正当化しようとしたのであろうか？　Theodore Koditschek の *Liberalism, Imperialism, and the Historical Imagination: Nineteenth-Century Visions of a Greater Britain* は、彼が「進歩の物語」（narrative of progress）と呼ぶ数々の歴史に関する著作に着目し、書き手たちが編んだ歴史を彼らの生涯や帝国との関与のなかで読み解くことにより、歴史書や歴史小説がいかに帝国主義の発展と関わっているかを明らかにしていく。啓蒙主義の時代、社会は段階を経て進歩するとの思想が定着して以降、19 世紀の歴史家、小説家たちはイギリスの発展をこの

進歩の過程と重ね合わせて、歴史のナラティブを構築していった。そして、彼らが編みだした進歩の物語のなかで、スコットランドやアイルランドといったケルト外辺と、インドやその他の植民地といった帝国の周縁は、包摂と排除、両方の言説がせめぎ合う空間となった。“Nineteenth-Century Vision of Greater Britain” という本書の副題が示すとおり、歴史を語ることは、イングランドを超えて徐々に拡大する “Greater Britain” を想像／創造していくことに他ならないのであった。

Koditschek の議論は 1800 年のアイルランド連合法を出発点とする。アイルランドをイギリスの一部として組み込むことにより、アイルランド社会と経済の発展を図った連合法であったが、新しい連合体が機能するためには、アイルランド人を他のイギリス人たちと結びつける新しい物語が必要だった。第 1 章では連合法前後に書かれた Maria Edgeworth や Sydney Owenson の小説とともに、Walter Scott の歴史小説が取り上げられる。征服者、被征服者の双方が受け入れられる物語を構築できなかった Edgeworth や Owenson とは対照的に、Walter Scott は双方にとって理想的な統一（union）の物語を生み出すことに成功した。Scott はイングランド対スコットランドの対立の歴史を、両者がともに郷愁をもって振り返ることができる過去のロマンスとして描き、その後の歴史的ナラティブに多大な影響を与えた。

第 2 章で Koditschek はインドの歴史に注目する。言語、文化、宗教、民族──あらゆる面で異なる遠く離れた土地の人々に対する独裁的統治を正当化する進歩の物語を構築することが、インドの歴史家たちに課せられた命題であった。インド・ヨーロッパ文化の発祥地という大きな枠組みのなかでインドを捉えようとした William Jones らオリエンタリストたちの歴史観は、19 世紀に入ると次第にインド近代化の必要性を強調する功利主義的ナラティブへと変化していく。James Mill の *History of India* はインド文化の価値を認めず、インドは自らの「野蛮な」文化を捨て去ることによってのみ、近代的な独立国家への発展が可能であると論じた。こうしたイギリス側からの歴史に対抗して、インドのバラモン Rammohun Roy は自国文化を保持しつつ進歩を実現する調和的ヴィジョンを打ち立てようとした。第 3 章は前章に引き続き、T. B. Macaulay によって頂点に

達するリベラル派帝国主義の歴史観が検証される。インド総督を経験したMacaulayにとって、イギリスの歴史は普遍的進歩が世界で実現される国家を超えた物語であった。イギリスのリベラリズムが世界中に拡大していく過程をたどった*History of England*には、インド人、アイルランド人など「後進の」人々に対して、このイギリス中心の歴史観を受け入れ自由と進歩の物語に参加するよう呼びかけるという教訓的な意図も隠されていた。

第4章ではJ. A. Froudeに焦点があてられる。自由よりは国家の安定を優先し、明らかに親プロテスタント的、国家主義的なFroudeの進歩の物語においては、帝国の統治には常に強制がともなうものであり、それに服従することが「劣等」民族に与えられた役割であった。進歩と平和はこうした「慈悲深い独裁」の期間を経てはじめて到達されうるとFroudeは考えたのだ。さらに、晩年のFroudeは都市のスラム化や階級間対立を解消する万能薬として移民政策を提唱し、チューダー朝イギリスの栄光を再現しようとした。第5章はヴィクトリア朝後期、進化論の影響を受けてますます排他的となる歴史観を概観している。MillやMacaulayの歴史観において、「野蛮」な民族の進歩は適切な統治と教育さえあれば数世代で実現可能とされたが、進化論以降、人類の進化はより長い時間軸で捉えられるようになる。イギリス人を頂点とする進化のヒエラルキーのなかで、「劣等」民族は分類され、管理される対象となっていった。

第6章では舞台は再びインドに移り、Macaulayが育成しようとした「血筋と膚の色はインド人でも、趣向、考え、道徳観、知性においてイギリス人」となったインド中流階級の知識人たちによる、自国の歴史のナラティブに光があてられる。彼らはイギリスの統治政策に時には批判的でありながらも、進歩の物語そのものを疑うことはなく、近代化を遂げたインドがいつの日か、イギリスと対等なパートナーとしての地位を獲得できるという希望を持ち続けた。だが、こうした彼らの希望は少なくとも彼らの存命中に実現することはなかった。Epilogueでは、アングロ・サクソンの植民地とのより緊密な連合体を擁護した、Sir John Seeleyの歴史観が紹介され、インド知識人たちの夢がいかに踏みにじられ、リベラルな帝国主義がその終焉を迎えたが論じられている。

本国と植民地の関係は母と子にたとえられることが多いが、それはむしろ、本国を信じ続けるも裏切られる植民地の悲恋のようにも見えてくる。たとえば、バルバドスの歴史家 N. Darnell Davis は Froude の歴史観を批判して、「われわれ植民地は大英帝国の欠くべからざる一員であり、知性においても文明化の過程においても政治的保護を受ける段階は終わった」と主張する。だが、植民地の人々の大英帝国の一員としての包摂を望む声は本国の歴史家たちに届くことはなく、“Greater Britain” というヴィジョンをめぐる中央と周縁の議論は終始不協和音を奏でたまま解消されることはなかったのである。

Koditschek の研究は、進歩の物語がいかに他者を排除する理論となり、結果的に帝国主義を正当化する論拠となり得たかを明らかにした。彼の議論のなかでも最も露骨にイギリス中心主義的歴史観を唱える歴史家のひとりが Froude だが、Ciaran Brady の *James Anthony Froude: An Intellectual Biography of a Victorian Prophet* では、単に帝国主義論者、人種差別主義者といった枠組みでは説明できない、Froude の人間像が浮かび上がる。幼くして母を失い、厳格すぎる父と兄のもとで愛情に飢えて育った幼少時代、Henry Newman に傾倒しやがては失望するオックスフォードの青春時代、12 巻からなる *History of England* や *The English in Ireland in the Eighteenth Century*、*Life of Carlyle* 他、数多くの著作を執筆する壮年時代、一度は追われた Oxford に Modern History の教授として迎えられる晩年時代──Brady は Froude の人生の一つ一つの段階を、緻密な資料調査にもとづき丁寧に描いていく。Brady 自身アイルランド人として、このヴィクトリア朝の歴史家に対して複雑な感情を抱いていたが、それでもなお彼の伝記を書こうと思い立ったのは、彼の勇気、知性、誠実さに賞賛の念を禁じえなかったからだと、Preface で述べている。じっさい、伝記を通して見えてくるのは、個人が自己中心的な利害を捨て、各自が与えられた義務を果たすことこそが、神の意志を実現する唯一の方法だという、きわめてヴィクトリア朝的な信念を持つ歴史家の姿なのである。

その一例として、アイルランドの歴史観があげられる。オックスフォード時代、二度にわたってアイルランドに滞在したさい、Froude は農民たちの純真な信仰に心打たれるいっぽうで、極度の貧困という現実に衝撃を

受ける。アイルランドに抗いがたい魅力を感じつつも、イギリス人としての道徳的義務感に駆られる Froude の心情はアイルランドの歴史記述にも大きな影響を与えている。アイルランドがイギリスに併合されることは大国に隣接する小国の宿命だが、同時にイギリス人はアイルランドを正しく管理する義務を怠ってきたと、彼は *The English in Ireland* のなかで強調する。1690 年から 1800 年までの歴史は、怠慢、既得権の保護、強欲からイギリス中央政府がアイルランドに対して数限りない不当行為を行ってきた歴史でもあった。Koditschek の議論では、併合とプロテスタント化がアイルランドの近代化に不可欠だという Froude の思想の帝国主義的側面が強調されるが、Brady の議論では道徳的側面が強調される。Froude はイギリスが世界を導く役割を担っていると信じて疑わなかったゆえに、被征服者に服従の義務を求めると同時に、征服者にも厳しい道義的責任を課したのであった。

Koditschek と Brady の著作を通読して感じるのは、言い古されたことではあるが、歴史を語るとは未来を語る行為なのだということである。Koditschek においては、中央、周縁の双方から進歩の物語を構築するなかで、未来の “Greater Britain” を想像／創造しようとする歴史家、小説家たちの絶え間ない奮闘の軌跡がたどられる。いっぽう、Brady においては、人間に課せられた道徳的義務と真摯に向き合い、過去を検証することで未来につなげようとした Froude の生涯が描かれている。さらに、これに関連して、歴史における想像力の重要性を改めて認識させられる。Koditschek は Scott の統一の物語が後の歴史家たちのナラティブに与えた影響を指摘し、Brady は Froude が歴史的想像力と詩的ヴィジョンを等価のものとして捉えていたと論じる。歴史家が研究対象とするのは「社会制度ではなく、人類の進歩や思想の発展といった大仰で空疎なものでもない。人生のさまざまな局面で苦悩し、ある時は打ちひしがれ、またある時は勝ち誇って立ち上がる個々の人間なのである」という Froude の言葉には、歴史研究の原点があるように思われる。歴史と文学は深いところで確かにつながっているのだと、これら二冊の著作は私たちに教えてくれるのである。